おごせ教育 Pick up

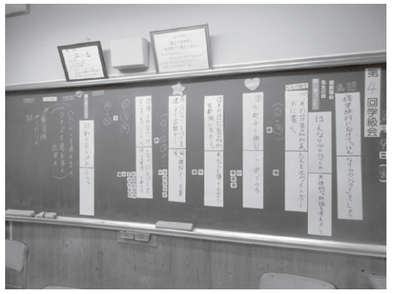
越生小学校

12月6日（土）の土曜授業日に、校内持久走大会を開催しました。冬晴れの気持ちのよい空の下、この日のために体育の授業や休み時間、放課後等で練習を重ねてきた児童が、それぞれの目標達成に向かって走りました。たくさんの声援を受けて、最後まであきらめずにゴールを目指す姿がとても晴れやかな気持ちにさせてくれました。

梅園小学校

12月6日（土）に校内持久走大会が開催されました。この日のために、練習を重ねて準備をしてきました。こどもたちは、たくさんの声援を受けながら、最後まであきらめないで、力いっぱい走り切ることができました。今年度も駿河台大学駅伝部の大学生にも協力をいただきました。ありがとうございました。

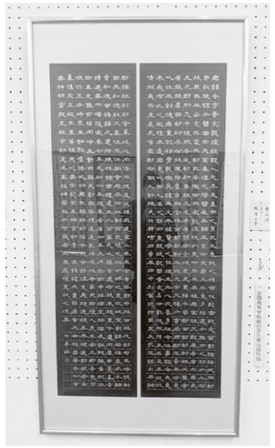
越生中学校



12月9日（火）に、西部地区学力向上のための授業研究会にて、特別活動の授業を公開しました。学級会での話合い活動をとおして、こどもたちのよりよい学びにつなげるための力を高める取り組みを学校全体で続けていきます。

おごせっ子広場

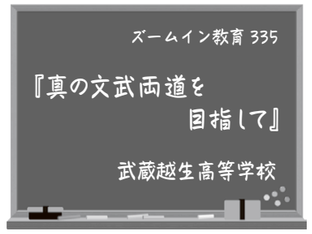
町内の小中学校や町の行事等に参加するこどもたちを写真で紹介するコーナーです。



梅澤七夢さんの作品

比留間嶺音さんの作品

本校では、真の文武両道を目指し、生徒が主体的に活動に取り組んでいます。運動部の活躍はご承知の通りだと思いますが、ここ数年文化部の活躍も目覚ましいものがあります。和太鼓部が全国高等学校総合文化祭（全国大会）に出場をしてA評価を収めました。当町出身の三年生比留間嶺音さん（越生中）も書道部門で埼玉県代表として同総合文化祭香川大会で最優秀賞に輝きました。二年生梅澤七夢さん（東秩父中）も今年度埼玉県高等学校書道展覧会において最優秀賞を受賞、来年度に埼玉県代表として全国高等学校総合文化祭への出場も決まっております。



越生浪漫 No.204

眠柳「梅花の別乾坤」(上)

今月と来月と2回に分けて、明治32年の「東京朝日新聞」の記事を紹介します。漢字もるびも掲載当時のままです。越生の梅林（当時は梅園村）を「別乾坤（＝別天地）」と讃え、世に知らしめた記事です。

「東京朝日新聞」明治32年（1899）2月14日
『朝日新聞〈復刻版〉・明治編』
城西大学図書館所蔵より

●梅花の別乾坤 上

眠柳

みわたせバ西より北に起伏する大巒小峯ハ雪ながら淡紫の霞匂ひて春來幽谷水潺々今や的礫の梅花ハ山村水郭の到る處に其芳しき香を放ちつ、偏に雅人の清賞を俟ち居り候

陰暦正月朔日の午前六時四十九分目黒發の汽車に駕して單獨探梅の途に上り申候指して行く途ハ埼玉縣秩父山の東麓そこに名にし負ふ梅園村とて峻峯に對し寒流に臨める羅浮梅花の一村これあり候もとより幽僻の境に候へバ蕪没いまだ世に聞えず候へども俳人春秋庵某の如きハ既に前年親しく是勝地に遊びて激賞措かず斯る山間に斯る佳境あるを感じ、とも聞き及び申居り候順路ハ飯田町午前五時發なれバ同じく七時に川越町に達すべく同町より西五里に越生町と申すがあり其町より更に一里餘西すれバ即ち梅園村に候小生ハ新宿發二番汽車にて參り候に付川越町へ到着いたし候ハ午前十時四十五分に御座候川越町より越生町へハ乗合馬車往復いたし居り候へども其會社ハ越生にあり候へバ毎日唯一回越生より川越に參りたる馬車が越生へ復り候に過ぎず候されバ川越より同町へ參る者ハ午後三時までハ待合さねバならぬ次第に御座候小生も格別いそぐ旅にても無之候へども午前十時半より午後三時まで待たさる、ハ退屈の至に堪へず候依て晝食後同町大字江戸町より腕車を倩ひて出發いたし候が越生までハ一臺八十錢に候

厘に市街を出で、西すれバ桑植るたる麥畑や水田や蒼松翠竹に裏まれたる藁屋や野川や土橋や雪を戴ける秩父の群巒や總て是れ早春田野の活畫圖に御在候是日ハ恰も正月朔日に候へバ高帽被りたる農家の阿兄や白端巾を頸に捲きたる村嬢等ハ參參伍々おもひ〳〵に艶飾したて、遊び居り候されバ平日ハ米車魚擔絡繹として絶えざる街道の由に候へども是日ハ一向に往來さびしく小生ハ風甚だ寒からぬ一等縣道を一高一低車上に搖られつ、越生へと急ぎ申候一等縣道とハ申すもの、道路にハ一面に砂利を敷つめあり橋ハ唯板を載せたる而已にて或ハ全く橋なく車夫ハ兩脚三里邊までを水に沒して漸く徒渉り致さねバならぬ場所も有之流石の健脚自慢の同人も爲に大に困憊の様子相見え申候やがて路傍の一茶店に車を停めて暫時休憩を命じ候處其茶店の破障子に美濃三枚を縦に繼ぎてそれに何やらん覺束なげに文字を認めて貼附したるが有之候乃ち讀み來れバ『治化追年盛』とあり其傍に『已亥元旦試筆松崎八五郎』と記されあり候明治聖代の難有さハ斯る僻陬にも教育普及いたし居り候

途上の田家に往々梅花これあるを認め申候幽馥の時に來つて衣襟を襲ひ候が無上に嬉しき心地いたし惡詩拙吟をもと心懸候へども遂に一首一句も成らず

して已み申候斯くて車ハ漸く進みて越上、顔振、羽黒の山々ハ漸く近く眼前に迫り來り候越生町に到着し、ハ午後二時五十分に御座候是町ハ川越町の十分一位に候へども道幅ひろく好き町にて越生分署越生銀行又越生座など申す劇場めきたるも有之候小生ハ車夫の所謂同町第一等の旅舍角屋と申すへ投じ候へども尚日の暮る、にハ時間これあり候に付直に又腕車を驅りて梅園村へ急がせ申候越生町より西一里餘一川西より來るあり流に傍ひて羽黒山の陰を廻れバ即ち梅園村に御座候

※眠柳（本名加藤米司〈1869～1921〉）。『東京朝日新聞』記者、冨山房を経て、明治末年小樽新聞社入社。大正9年独立して『新小樽』を創刊するが失敗して『函館毎日新聞』主筆に転じるも急逝。

明治時代（推定）の越生梅林（新聞記事とは無関係）